

猿 橋
小学校

瑛玖良

瑛玖良校は明治期における猿橋小の旧名。切磋琢磨の意が込められている。

言葉で伝えることの大切さ

校長 澁谷 一男

1階の廊下で2年生の女の子に呼び止められた。「校長先生見て！」と見せてくれた袋の中に入っていたのは、たくさんのどんぐりの実。「すごい！たくさん拾ったね。」「あっちにいっぱい落ちていたよ。」うれしそうに説明してくれるつやつやした頬は、まるでどんぐりのようだった。

こんな子どもたちとの日常的なやり取りが実に楽しい。

日本には、古くから物事をはっきりと言わない文化がある。相手の動作や表情、言い回しからそれとなく意図を察するコミュニケーションだ。「これくらい言わなくても分かってくれるだろう」「そこまで言っては失礼かな」日本人の奥ゆかしさ、謙虚さの表れとも言える、この日本人特有のコミュニケーションを否定するつもりは毛頭ない。しかし、昨今、こうした「察するコミュニケーション」が取りづらくなっていると感じるのは私だけではあるまい。

理由は様々考えられるだろうが、その一つに「想像力の低下」があるのではないだろうか。SNSの普及に伴い、欲しい情報は瞬時に入手できる。ゲームや動画に膨大な時間を費やし、読書離れが進む。このような環境で、想像力を培うのは困難だ。想像力がなければ相手の意図を察することができないのは当然のことだろう。

今年の夏、ある研修会で、コミュニケーションに関する講演を聴く機会があった。講師は、プレゼンテーションプランナーの山本衣奈子^{えなこ}さん。山本さんは、複数の企業に入り、組織の人間関係を調査した経験があるという。山本さんによると、企業の組織は、「いきいき集団」と「どんより集団」に分類することができ、それぞれの集団には共通した土台があるという。「生き生き集団」には、「笑顔・挨拶・声掛け」という共通の土台があるのに対して、「どんより集団」に共通している土台は、「これくらい言わなくても分かるだろう」という体質だったそう。

「察するコミュニケーション」が取りにくくなっている今だからこそ、言葉で伝えることの大切さを改めて見直してみたい。

「優しい言葉は、たとえ短く簡単な言葉でも、いつまでもいつまでも心にこだまします。」マザーテレサの言葉である。子どもたちには、優しい言葉、温かい言葉のシャワーをどんどんかけてやる、それが私たち大人の努めではないか。

